



図1. ジンサンシンバンムシの越冬状況.



図1. クロキマダラケシキスイ.

日光を当てたりするとほどなく動き出したので、仮に採集しないでそのままの状態で居続けていれば、春になって気温が上がるのを待って活動を始めるものと思われた。

末筆ながら、本報告を助めていただいた岩田隆太郎氏に厚くお礼申し上げます。

引用文献

酒井雅博, 1995. シバンムシ p. 268-270. 日本家屋害虫学会編, 家屋害虫事典, 井上書院, 東京.
イカリ消毒の害虫診断・駆除商品情報サイト: <http://www.ikari.jp/gaicyu/12020d.html#top>

(上田衛門 152-0032 東京都目黒区平町 1-16-11)



図2. ムナクボヒラタケシキスイ.

【短報】 東京都区内で冬季の夜間に樹液に来ていたケシキスイ類の観察例

東京都区内の、とあるポイントでは、数本のアカガシおよびシラカシの幹から、ひと冬を通して樹液が流れ続けている（または滲み出ている）。それらの樹液の流れ口には、木屑が溜まっていたり小さな穴が開いていたりすることから、樹液が出ているのはカミキリムシ類の幼虫が冬季にかかわらず幹の中で活動している作用によるものと見られる。筆者は、その樹液を2013年末から2014年初にかけてひと冬の間、不定期ながらおよそ7~10日置きの間隔で夜間（20時から22時の間のいずれかの時刻）に観察を続けたところ、真冬の時期を含め、ケシキスイ科の2種が樹液で活動していることが認められたので、報告する。

活動していた2種のうちの一つは、クロキマダラケシキスイ *Soronia lewisii* Reitter, 1884 である。本種の採集・目撃記録は、次のとおり。

1ex., 東京都目黒区八雲, 22. XI. 2013; 11exs., 同所, 30. XI. 2013; 3exs., 同所, 4. XII. 2013; 3exs., 同所,

11. XII. 2013; 2exs., 同所, 22. XII. 2013; 3exs., 同所, 28. XII. 2013; 2exs., 同所, 1. I. 2014; 1ex., 同所, 4. I. 2014; 1ex., 同所, 12. I. 2014; 1ex., 同所, 25. I. 2014; 1ex., 同所, 18. II. 2014; 4exs., 同所, 26. II. 2014; 1ex., 同所, 28. II. 2014.

筆者がこの観察を始めたのは、おおかたの甲虫が活動しなくなる11月下旬のことで、アカガシの樹液で1個体を見つけたのが、筆者にとって本種との初めての出会いだった。その後、シラカシの樹液でまとまった数の個体が見つかり、そのシラカシの樹液が涸れた後も、アカガシで何頭か個体を見出すことができた。1月から2月にかけての厳冬期に入ると、夜間の気温は東京都区部でも5℃を優に下回り、時には零度近くとなることもあるが、そのような寒冷な状況下でも、数はきわめて限られていながら、本種の個体を幹の表面に見出すことがあった。そのような個体は、さすがにほとんど身動きすることなくじっとしていたが、ライトを照らし続けたり落ち葉の柄で突いたりすると動き出したので、冬眠中ではなく明らかに活動中であることが伺われた。また、2月下旬の、辺りに雪

の塊が残っているような夜にも、交尾をしているペアの個体を観察した。

なお、樹液が涸れた木では、樹液が出ている間に見られていた個体たちがその木ではまったく見られなくなる。姿を消したそれらの個体は、気温が低い中で別の木の樹液を求めて移動したとはとても思えず、おそらく樹皮下に潜り込んで休眠態勢に入っていたのではないかと推測される。すなわち、冬の間、樹液という食餌にありつく個体もいれば、じっと休眠中の個体もいるということであって、樹液で見られる個体数が非常に少なかったことからすれば、後者の方が多数であろうと思われる。

ちなみに、観察時間を夜間にしたのは、仕事がある筆者にとって夜間の方が継続的・安定的に観察を続けられるという理由によるものであった。また、本種が夜間に数個体集まっている樹液場を試みに昼間にチェックしてみたところ、1頭も見られなかったので、冬季といえども本種が主に活動をするのは夜間であると思われた。

さて、クロキマダラケシキスイは、東京都区部におけるいくつかの記録を見る限り、主に5月から7月にかけて活動していることが伺われる。例えば、皇居においては、本種は6月にまとまった数の個体が記録されている（野村ほか，2000）。また、大田区（大田区，1997）と明治神宮（岡田ほか，2013）における調査では、本種の記録は5月から7月の間に限られている。これに対して、本観察のポイントとなったアカガシとシラカシは、春になって気温が上がり夏に向かっていくと、カミキリムシの幼虫の活動が変化するためか、多くの樹液が涸れてしまう。このポイントにおけるクロキマダラケシキスイは、そのようなポイント固有の環境変化に適応した結果、気温の低い冬季にも活動する個体を維持しているのだとすれば、非常に興味深いことであると思われる。

もう一方の種は、ムナクボヒラタケシキスイ *Eपुरaea (Eपुरaea) foveicollis* Reitter, 1873 である。本種の採集・目撃記録は、次のとおり。

1ex., 東京都目黒区八雲, 30. XI. 2013; 2exs., 同所, 4. XII. 2013; 3exs., 同所, 11. XII. 2013; 1ex., 同所, 4. I. 2014; 1ex., 同所, 25. I. 2014; 1ex., 同所, 28. II. 2014; 1ex., 同所, 9. III. 2014.

本種も、11月下旬から3月上旬にかけての毎月、クロキマダラケシキスイほど頻繁には見られなかったものの、樹液またはその近くの幹の上に個体を見出すことができた。本種を見出した数がクロキマダラケシキスイと比して少なかったのは、

クロキマダラケシキスイは都区部においても普通種である一方、本種は東京都で未記録であり、そもそも個体数が少ないことを理由とするものではないかと思われた。また、本種についても、おそらくは、樹液に来る個体のほかに、樹皮下等で休眠態勢に入っている個体が（むしろ多く）並存しているのであろう。

本種の観察もクロキマダラケシキスイの観察と同時に夜間に行ったが、本種がそもそも夜行性であるかどうか筆者は知らない。クヌギ等の樹液に集まる他のケシキスイ類の例からすると、むしろ夜間に活動が活発化する種が多く、本種についても、冬季といえども、夜間に観察することで活動中の個体が見つかる可能性が高まったものと考えている。

さて、ムナクボヒラタケシキスイの成虫の活動期間は、通常冬季にも及ぶのだろうか。東京都では本種の記録がそもそもないが、横浜市南部を中心とする円海山地域の調査では、本種は6月と7月のほかに12月にも記録されている（円海山地域自然調査会，2000）。それにもかかわらず、本種が1月から2月にかけての厳冬期においても樹液において活動していたことは、観察記録として価値のあるものではないかと思われる。

なお、ムナクボヒラタケシキスイは、区内の別の場所（目黒区駒場）の雑木林内における吊り下げ式 FIT（衝突板トラップ）にも春先に数頭落ちたことがあり、その記録も参考までに下に掲げておく。本種は、少なくとも東京都目黒区においてはそれほど珍しくないように思われる。

1ex., 東京都目黒区駒場, 28. IV. 2013; 1ex., 同所, 2. V. 2013; 1ex., 同所, 6. V. 2013.

末筆ながら、ムナクボヒラタケシキスイについて筆者の採集個体の同定をしていただいた久松定智氏に、心よりお礼申し上げる。

引用文献

- 野村周平・平野幸彦・齊藤明子・上野俊一・渡辺泰明, 2000. 皇居の甲虫相. 国立科学博物館専報, (36): 220-222.
 岡田圭司・平野幸彦・新里達也, 2013. 鎮座百年記念第二次 明治神宮境内総合調査報告書 明治神宮の甲虫類, 303.
 大田区, 1997. 大田区自然環境保全基礎資料調査報告書 大田区の昆虫, 138.
 円海山地域自然調査会, 2000. 円海山域の昆虫. 神奈川虫報, (130): 198.

(上田衛門 152-0032 東京都目黒区平町 1-16-11)